ヴィゴツキー理論における自己意識と概念的思考の問題

――ヘーゲル『精神現象学』に照らして――

神　谷　栄　司

小論は、自己意識と概念的思考とについてテーマに即して大まかに、いくぶん形式的に、したがって部分的に考察したものである。このことは、研究の始まりには避けがたく、その意味で、小論はテーマに対する予備的検討であると位置づけられる。

Ⅰ　ヴィゴツキーにおける自己意識と概念的思考

きわめて一般的に言えば、自己意識の規定は事物に関する意識ではなく自己に関する意識である。それ故、自己意識は思考のみではなく意識の全体に関与している(たとえば「自己の感情の認識」にも関与している)が、小論ではその目的との関連で思考との関係に焦点づけて論じていくことにする。

ヴィゴツキー(1896-1934)はすでに初期の心理学研究のなかで自己意識に言及しているが、もっとも充実した考察が見られるのは自己意識が形成されつつある少年期(ヴィゴツキーの用語を用いれば、13歳と17歳の二つの危機的年齢のあいだにある時期)の研究、たとえば『少年の児童学』(1931 / 1984 // 2004)である。

とはいえ、ヴィゴツキーの初期の著作から彼の自己意識論を拾い上げてみると、次のような方法論的に重要な二つの命題が見つかる。

1

自己意識は他者に対する意識と同じメカニズムを持つ。すなわち他者を認識するのに応じて自己を認識する。

自己の意識(自己意識)のメカニズムと他者の認識のそれは同じである。私たちは、他者を意識するので、また自己に対する私たちは私たちに対する他者と同じであるので、他者を意識するのと同じ様式で、自己を意識するのである(1924 / 1982, c.52 // 1987)。

2

自己意識は「〔事物に関する〕意識の意識」である。

プレハーノフが正しく規定したように、自己意識は意識の意識である(1927 / 1982, c.413 // 1987)。

とりあえずここで指摘しておきたいことは、この二つの命題は、後述するように、ヘーゲル(1770-1831)の『精神現象学』(1807 // 2002 // 1997)における自己意識論にすでに含まれていることである。

後の『少年の児童学』のなかには、自己意識と思考との関連についてもっとも直接的に表現された重要な命題が論じられている。それを仮に第三の命題としておこう。すなわち、

3

自己意識と概念的思考は不可分な関係にあり、自己意識なしに概念的思考が成り立たないのと同時に、概念的思考なしには自己意識は形成されない。

念のために、思考の形式と内容としての概念的思考を、ヴィゴツキーがどのように捉えたのかについて述べておこう。概念的思考を形式の面から捉えると、概念を用いた思考と捉えるのが一般的であるが、概念的思考よりも発達的に前にある思考は、それぞれの時期にある「概念の等価物」が用いられている。それはまず混合主義的形象であり、次いで、複合である。こうして形象—複合—概念をもちいた思考が思考形式の発達である[1)](1934 / 1982 // 2001, 第5章参照)。

もちろん、各形式には独特な思考内容が照応している。ヴィゴツキーの考えによれば、概念的思考の形式に照応する思考の内容は、概ね、以下の三つの内

容に集約できるであろう(神谷, 2010, pp.152-3参照)。

1　外的世界の認識と理解とにかかわる思考内容である。概念的思考は、「現実の基礎に横たわる深い諸連関の解明、この現実を制御する法則性の認識、知覚された世界に掛けられた論理的諸関係の網によるその世界の秩序づけ」をもたらす(1931, c.301 / 1984, c.65-6 // 2004, p.85)。

2　概念的思考は他者を理解し、社会的意識を認識する手段ともなる。「概念は、外的現実を認識するシステムをもたらし、その認識の基本的手段となるだけではない。概念はまた、他者を理解する基本的手段でもあり、歴史的に形成されてきた人類の社会的経験を適切に習得する基本的手段でもある。概念において初めて、少年少女は社会的意識の世界をシステム化し認識する」のである(同上, c.301-2, c.66, p.86)。

3　概念形成とともに生じてくるのは自己意識である。――「有名な定義によれば、語は自己自身を理解する手段であるほど、それだけ他者を理解する手段となる。『語はその誕生のときから語り手にとって自己を理解する手段であり、自己の知覚を統覚する手段である』。そのため、まさしく概念形成とともに、自己知覚・自己観察の集中的な発達、内的現実、自分自身の心的体験の世界の認識の集中的な発達が始まる。フンボルトの正しい指摘によれば、思惟は概念においてのみ明瞭となるのだが、まさしく概念形成とともに少年少女は自分自身を真に理解しはじめ、自分の内的世界を明瞭なものにする。このことなしに、思惟は明瞭さに到達しえないし、概念になりえない」(同上, c.300-1, c.65, p.85)。

このように、概念形成は自己意識や自己理解を可能にするのだが、同時に、明瞭な自己意識なしに概念は成立しないという逆の関係も指摘されている。自己意識の発達に応じて概念も明確なものになる。これが概念的思考という形式にもっとも照応した新しい思考の内容であろう。

ここに深く究明すべき理論問題が姿を表している。すなわち、自己意識という個別的・個人的・主観的なものが概念的思考さらには真の概念という普遍的・客観的なものにどのように接合していくのか、という問題である。その解答が見出される場所をあらかじめ指摘するとすれば、それは自己意識の運動(ヘー

ゲル)のなかに、同じことであるが、自己意識の発達(ヴィゴツキー)のなかにある。

Ⅱ　なぜ「ヘーゲル『精神現象学』に照らして」なのか？

任意の理論とそれとは異なる任意の理論とを対比し比較してみても、それはあまり生産的な作業とは言えまい。ヴィゴツキー理論をヘーゲル哲学の、しかも、その一部である『精神現象学』の光を当てる、という作業には、明確な理由が必要となるであろう。ヘーゲル哲学もヴィゴツキー理論もともに弁証法的であるという理由づけは、間違ってはいないが、まだ十分ではない。少なくとも、ヴィゴツキーの伝記的歴史および理論内容からの考察が必要である。

第一の側面について鍵を握るのは、グスタフ・シュペット(1879-1937)とヴィゴツキーの関係であろう。ギタ・ヴィゴツカヤら(1996)やザヴェルシネヴァ(2006)の研究から、ヴィゴツキーがシュペットから学ぶことがあったのは事実だと考えられる。だが残念なことには、ヴィゴツキーに対するシュペットの影響はどのようなものか、前者は後者から何を学んだのかは、彼女らの研究のなかで十分には示されていない[2)]。是非とも実証的な研究が必要なところである。そのシュペットは、ヘーゲル『精神現象学』のロシア語版の訳者であり、しかも、21世紀になっても彼のロシア語訳が重版されていることから、彼のものはロシア語による定訳であると考えてよいであろう[3)]。シュペットとヴィゴツキーの関係の中心(あるいは中心の一つ)は、『精神現象学』にあるというのが、筆者の推測である。

第一の側面に劣らず、いやそれ以上に意味があるのは第二の側面である。つまり、ヴィゴツキー理論のなかにヘーゲルの『精神現象学』と交差する点やパラレルな面がたしかに認められる。しかも、それらはヴィゴツキー理論の根幹にかかわってくるような内容であるので、もし第一の側面における筆者の推測が的外れであったとしても、第二の側面は《自分を研究せよ》と雄弁に迫ってくる。

両者の交差点、接線、パラレルな面をかいつまんで示してみよう。ヘーゲルの意識論を形式的に区分すれば、「感覚的確信 чувственная достоверность」―「知覚 восприятие」―「悟性 рассудок」という発達図式で表される。

1

まず、もっとも低次な意識である感覚的確信を取り上げてみよう。感覚の次元で知が掌握するものは「いま」「ここに」ある個別的な「このもの」であり、そのような知の主体もまた「いま」「ここに」いる個別的な「この人」である。その限りにおいて、「この〔感覚的〕確信は対象からまだ何一つ見逃していないし、それの眼前にある対象はあらゆる完全さをそなえているのだから」、その知は「もっとも豊かな認識」「無限の豊かさの認識」「もっとも真なる確信」を表している(1807 // 2002, c.51 // 1997)。しかし、それは外見上のことなのである。なぜなら、時間の経過にそって「いま」はたえず新しい「いま」となり、また、人も「ここ」から「あそこ」(新しい「ここ」)へと移動するからであり、もし、そうして感覚的確信の次元で得られる個別的なものの総計を無媒介的に—つまり感覚的確信の次元で—抽象すると、そこに姿を現すのは、ただただ無媒介的に「有る」という「もっとも抽象的で貧しい真理」であるからだ(同上)。こうして何一つ欠けることなく最も豊かに世界を掌握しているかのように思われる「外見」と、その内実はきわめて貧しい「有る」にしか辿り着けない感覚的確信の本質—これがここでヘーゲルの言いたいことである。

ヘーゲルとヴィゴツキーの交差の観点から着目しておきたいことは、媒介性についてである。ヘーゲルは媒介性をここでは否定の側面から取り扱っている。ヘーゲルは、感覚的確信は「対象を無媒介的に構成する知」、「無媒介的なもの」あるいは「有〔有るということ〕の知」であるのだから、感覚的確信への考察も、私たちに示されている通りのものに何一つ変更せず、「概念の助けを借りずに」把握せねばならない、と述べている(1807 // 2002, c.51 // 1997)。ここに含意されているのは、対象を把握する際の概念(さらには形象、表象)が媒介と位置づけられていることであろう。さらにヘーゲルは、無媒介的な感覚的確信は語 слово、ことば речь、言語 язык によって表現しえない、と考えている。それはどういうことか。ヘーゲルは次のように書いている。

> 人びとは、私がこれに書く、あるいは、より良く言えば、私が書いたこの一枚の紙を念頭においている。しかし、彼らは自分が念頭においているものを語で表現できない。人びとが自分が念頭においているこの一枚の紙を実際に語で в словах 表

現したいと思っても、また語で в словах 表現したとしても、これは不可能である。なぜなら、念頭におかれた感覚的な「このもの」は、それ自体が普遍的な意識に属する言語には для языка 達し得ないからである（同上, c.58）。

簡単に解説しておこう。私が書き付けた「いま」「ここに」ある一枚の個別的な紙を皆に示して、これは何か、と質問すれば、たいてい、《それは紙だ》という答えが返ってくる。ところが、そう言ったとたんに、解答者は《紙一般》を表す語によって「いま」「ここに」ある「このもの」を捨象し、感覚的確信の次元から抜け出してしまう。解答者が迷い込むのはすでに普遍性を原理とする知覚[4]の次元なのである。[5]

この点について、ヘーゲルは実に興味深い指摘をしている。――ことば речь は「その神的本性にもとづいて臆見を反対のものに直接に変形させることができる」（同上, c.58）。ヘーゲル流にいえば、純粋個別性である感覚的確信をその対極にある純粋普遍性である知覚へと変形させる《神にも似た》行為を実現するものが、語、ことば、言語という媒介なのだ、ということであろう。ヴィゴツキーは、語によって媒介された知覚が対象を一般化する性質をもつこと（「一般化された知覚」）を指摘し、さらにそれにとどまらず、ことばによって人間は形象、複合、概念を獲得し、それによって思惟することを可能にしている、と考えたのであるから、ここにヘーゲルとヴィゴツキーが深く交差する一つの点を見出すことができる。

2

次に、ヘーゲルとヴィゴツキーとのパラレルな面であるが、それは両者の自己意識の把握に明瞭に現れている。ここではヴィゴツキーが自己意識に関してヘーゲルに直接に言及した箇所を取り上げておこう。

〔自己意識の形成は人格の発達のある歴史的な段階にほかならない、ということについて〕この概念はヘーゲルの哲学にすでに見られる発達図式に照応している。物自体は発達しない形而上学的存在であるとするカントとは違って、ヘーゲルにとって『自体〔即自的〕в себе』の概念そのものが意味するのは、事物の発達の初期

的モメントないし段階にほかならない。まさしくこの観点からヘーゲルは芽を即自的植物とみなし、子どもを即自的人間とみなしたのである。あらゆる事物は最初は即自的である〔それ自体のなかに始まりがある〕、とヘーゲルは述べている。ア・デボーリンは、この問題設定において興味深いのは、ヘーゲルが事物の認識可能性を事物の発達と―より一般的な表現を用いるなら―、事物の運動・変化と結びつけていることだ、と考えている。この観点から、ヘーゲルは完全な根拠をもって、『対自的 для себя 存在』のもっとも身近な事例は私たちにとって自我である、と指摘している。「人間を動物から区別し、したがって、概して自然から区別するのは、主要には、人間が自分を自我として知ることによってである」。

自己意識を発達しつつあるものとして理解することは、移行期〔少年期〕のこの中心的事実への形而上学的アプローチから私たちを最終的に解放している(1931 / 1984, c.232 // 2004)。

ヘーゲルは、ほかならぬ『精神現象学』のなかで、自己意識を「即自的な自己意識」から「自由な自己意識」への発達(弁証法的運動)として哲学的に描いているのであるから、上記のように述べるヴィゴツキーは明らかに『精神現象学』を意識している、と考えてよいであろう。両者がどのようにパラレルな関係にあるのかについては、後述することにする。

3

なお、『精神現象学』において、ヘーゲルとヴィゴツキーの接線として現れているものは、「即自」「対他 для других」「対自」の概念であろう。ヴィゴツキーは子どもの指示的身ぶり(指差し)を事例にとって、それを上記の三つの概念を用いて特徴づけ(不首尾におわる捕捉の動作、近くにいる大人による意味づけ、指差しの成立)、さらに、それを子どもの文化的発達の一般法則にまで高めた(1929 / 2003,c.1021 // 2008, pp.239-40, 1931 / 1983, c.143-4 // 2005, 180-1)。その際、ヴィゴツキーは「ヘーゲルの分解」(1931 / 1983, c.143 // 2005)に言及し、上記の三つの概念がヘーゲルに由来するものであることを示唆している。もっとも、筆者ははたして「対他」はヘーゲルのなかに含まれているかどうか疑いを持っていたが、ヘーゲルが考察する自己意識の発達過程のなかに含まれていたのだ。

もっとも、それは「対他」という用語はほぼ使われていないが、内容的には類似したものである(後述)。

Ⅲ　悟性・自己意識・理性

ヘーゲルの『精神現象学』における自己意識論の優れた特質は、(1)悟性と理性を区別したうえで、(2)悟性から理性への移行の中間に自己意識がおかれていること、(3)さらにその自己意識を発達するものとして考察していること、である。

だが、その前に、『精神現象学』においては、すべてが流動し、運動し、発達していることを強調しておかねばなるまい。固定的に捉えられがちな「弁証法」そのものも、「真理」も、絶えず運動している。命題(規定)―その否定(止揚)[6]―否定の否定(止揚の止揚)という弁証法の本質的モメントはいずれにおいても認められるが、たとえば、「感覚的確信の弁証法」(1807 // 2002, c.57 // 1997)ということばは、感覚的確信の次元における「この存在に固有な弁証法」(同上, c.52)を含意している。敷衍すれば、本質的モメントは同一だとしても、具体的には、知の各段階に固有な弁証法が働いていることになり、こうして弁証法そのものも生きいきとするのである。[7]

このことにヘーゲルが用いる「真理」「真なるもの」ということばも関連してくる。ヘーゲルは真理さえも運動すると捉えている。それは、「感覚的確信の真理」(同上, c.53)、「知覚の真理」(同上, c.62, 63)、「悟性の真理」(同上, c.81)ということばが含意しており、知の各段階に固有な運動が顕わにする固有な存在こそ、ここでの真理なのである。

しかしながら、本章の問題を焦点化するために、知の壮大な運動―つまり知的側面から捉えられた《人間の弁証法》―をいったん止めて、ヘーゲルによりながら、感覚的確信、知覚、悟性という《事物―意識》の連関における知の諸段階にもっとも固有なそれぞれの「真理」とそのそれぞれの限界について指摘しておこう。

1

すでに述べたように、感覚的確信にもっとも固有な真理とその限界は、世界と私との関係は直接的、無媒介的であり、感覚的確信は「いま」「ここに」ある事物の無媒介的な豊かさをもった知であるが、それを抽象すると(止揚すると)、驚くべきことに、豊かな内容がなくなり、ただ残るのは空疎な「有る сущее」のみである。まるで光と緑と草花とワインに満ちた世界から一挙に闇の世界に転落したかのようなものが止揚の結果であった。ふたたび、驚いて、それを止揚すると、もとの「いま」「ここに」に逆戻りする。つまり、感覚的確信の次元における知の運動は、このように平面において円環を描いているにすぎない。純粋な個別性—内容が空疎な普遍性(この場合は内容のない「有る」)—そして再び純粋な個別性へ、というその単純な円環の運動は、実は、悟性にいたるまでの《事物—意識》の連関にある意識論に尾を引いている。

2

次に登場する知覚は感覚的確信とは正反対に、すでに媒介的な知であり、純粋な普遍性であった。その単純な普遍性を支えるものは、知覚の過程を表す「指し示す運動」のモメントと「対象」の運動のモメントである(同上, c.60)。「指し示す」というのは、たとえば、《これは時計だ》という語であらゆる時計という対象を指示することを意味する。それが純粋な普遍性である。だが、感覚的確信が個別性を表したのに対して知覚は普遍性を表している、というだけではない。知覚はそれよりも先に進んでいきながら、新しい袋小路につきあたる。知覚は対象との関係では単純な「一つ」の統一から始まるのだが、その統一の内部に「区別」をもたらす。つまり、「一つ」のもののなかに「多数」の性質が把握される。たとえば、ヘーゲルが述べていることだが、塩という「一つ」の事物には、「白くもあり、また辛い味でもあり、また立体でもあり、またある重さもある、等々」(同上, c.61)と「多数」の性質が認められる。これらの性質は、個別性のなかにあった感覚的確信の知の豊かさが普遍の次元で示されたことに意味をもつものの(同上, c.61)、それらはお互いに影響を与えることができず、知覚の考察はここから先には進めない。たとえば、「白い色は立体であるものに影響を与えないし、それを変更しない」(同上, c.61-2)のである。[8)]

もう一つの袋小路は、知覚には錯覚のような幻想がつきものである、という点にある。ヘーゲルは、知覚の次元において「対象は真なるもの」であるが、意識は「自己にとって変わりやすく非本質的なもの」であるので、ここから幻想が起こることもある、と考えている(同上, c.63)。なお、ヘーゲルは、第一の袋小路に関連して、「一つ」の統一をなしている事物の多数の諸性質は「言語 язык とはまったく異なる私たちの眼などに照応して」(同上, c.65)分解される、とより具体的に述べている。このことは第二の袋小路にもかかわってくるであろう。

3

さて、悟性についてであるが、ここではヘーゲルが区別した悟性と理性の相違を念頭において述べることにする。「一つ」の事物のなかに区別を設けることは知覚の次元において始まったが、その次元では区別されたモメントがどのような連関ももたないところに特徴があった。知覚が対象とする事物はただ多数の性質をもつということにとどまるのである(塩の事例)。悟性は、それを乗り越えて、区別されたモメントを関連づけるようになる。ヘーゲルは古典力学的な運動を念頭において、区別されたモメントを考察している。それは「自己の外的発現」と「自己へと逆戻りする力」(同上, c.73)、端的にいえば、力の作用と反作用のことである。力はたしかに二分されるが、「それら〔二つの力〕の存在はむしろ他のものを通して純粋に措定される」(同上, c.76)のであって、「各々の力は他のモメントのおかげで…有る」という相互依存性は認められるが、それ以上のものではない(同上)。そこには対立性や否定性が見られないわけで、そうであるのは「これらの力には、それらを担いそれらを保持するかのような固有の実体 субстанция をもっていない」(同上, c.76-7)からである。結局、悟性は力という概念によって現象のなかに入り込み、事物の「内面」〔内的本質〕に浸透しはじめたが、力を重量に還元し、種々に規定される諸法則を一つの大法則(万有引力)に溶かし込むことによって、事物の個別性から無制約的な普遍性に戻っていくのである。それは、すでに述べた感覚的確信の真理であった、個別性の放棄による空疎な普遍性の獲得を、次元は異なるが引きずっている。ヘーゲルが「二つの力の戯れ」(同上, c.75)と述べたのは、このことであろう。

4

二つのモメントの相互依存性とそれを超える(止揚する)ものについて、いくらかの補足を述べておこう。《左》は《右》があって初めて成立するものであり、その逆に後者の前提は前者でもある。しかし、それらを平面において動かしてみれば、いま《左》であったものは《右》にもなりうる。これらは平面の一つの相対的モメントとして意味を持ち得ようが、せいぜい、《左》と《右》の対立から出てくるものはそこまでであろう。二つのモメントの相互依存性が語ることはそのようなものであり、それはそれらのモメントが「固有の実体」を持たない、単純な(したがって空疎な)概念にほかならないからであろう。その対立は真の対立ではない。これが悟性の特質であり、ヘーゲルが悟性を「常識」(同上, c.69)と呼んだことはよく理解できる。この悟性を超える理性の立場とはどのようなものか。《有る》と《無い》を事例にして考察してみよう。さしあたり、《左》と《右》と同じように、《有る》も《無い》もお互いを前提にして依存しあっている。考えやすくするために私という存在を例にとれば、私が《有る》というのは、誕生するまでは私は《無い》ものであったからであり、死にいたって私が《無い》になるまでは《有る》ということである。二つの《無い》によって区分された時間に私は《有る》ということになる。これは悟性の認識であり、《私が死ぬのは私が生まれてきたからだ》と言ったり、《私が生まれてきたのは死ぬためである》と言ったりすれば、たしかに少々の深みが感じられるものの、悟性から一歩も外に出るものではない。それは《ことばの戯れ》にすぎない。それに対して、この場合、理性の知は、《有る》ことのなかに《無い》ことを捉え、同じことであるが、《無い》ことのなかに《有る》ことを把握するところから始まる(存在と非存在の統一)。私が《有る》、つまり、生きていることを細胞レベルの実体として捉えるなら、動物において二つの新しい細胞への分裂を含む細胞発生過程はたえず、「アポトーシス細胞」つまり「死につつある細胞」が主として小さくなり、周りの細胞に吸収されていく「プログラム細胞死 programmed cell death」を含んでいる(Lewin, Benjamin et al., 2007 // 2008, p.431 et al.)。また、精神の次元で捉えるなら、私のなかに新しいアイディアが浮かんだとき、それを同類のそれまでのアイディアと区別、比較、対立させ、新しいアイディアがより真理に近いと考えられるときには、古

いアイディアにはその有効な範囲を限定するとか、転倒させるとかの変更を蒙らせて(止揚して)、古いアイディアそれ自体の死を準備することになる。このように《有る》ことは《無い》ことを内に含むのである。

5

だが、ヘーゲルによれば、悟性から理性に移行するには、それまで事物を対象にした意識のなかでの知から、意識を対象にした意識における知への大きな飛躍が必要であり、そこに自己意識が姿を現してくる。それは人間の知が事物の「内面」に浸透していく不可欠の媒体である。ヘーゲルの表現を用いれば、現象の「内面」は幕で遮られている。その幕の前で立ち往生しているのが《事物—意識》の直接的連関のなかにある知(感覚的確信、知覚、悟性)である。その幕の後ろに私たち自身が回りこまねばならない。「『内面』において『内面』を凝視すること」(1807 // 2002, c.92 // 1997)が必要だからである。つまり、《意識—意識(自己意識)》の連関、ヴィゴツキーが言及したような「意識の意識」が必要となるのである。

Ⅳ　自己意識の発達

1

ここではまずヘーゲルの自己意識論の主要なモメントだけを考察することにしよう。

すでに述べてきたように、事物を対象にした意識(感覚・知覚・悟性)に対して意識を対象にする意識が自己意識によって可能となった。知の新しい形態(自己自身についての知)を以前の知(事物についての知)と比べてみると「後者の知〔事物についての知〕はなるほど消え失せたが、同時に、そのモメントはやはり保存された。……臆見の存在、知覚の個別性およびそれと対立する知覚の普遍性、同じく悟性の空疎な内面は、いまや本質としてではなく、自己意識のモメントつまり……抽象や区別として有る」(1807 // 2002, c.94 // 1997)。失ったものは事物に関する知の自立性である。このことは事物と結びついた知はそのモメントが意識に吸収されたことを意味するのだから、知の分析や考察をより

深くする可能性を得ることになり、その結果、事物をより深く考察する可能性が開かれてくる。意識のなかに吸収された直接的な知が今後は媒介的に作用するようになる。これが即自的な自己意識であるが、その段階における意識の内容面では、まだ、それまでの知と大差がない。自我の観点からすると、それはまだ区別されていない自我だということになる。

2

ヘーゲルは悟性を力の運動に擬して考察したが、自己意識の発達については生命過程に擬している。すでに意識の対象は外的事物ではなく意識であるので、そのような意識は生命過程のなかにあると捉えることは合理的である。そこから特に取り出されるモメントは、《自己への反照(省察 рефлексия)》と《欲求 вожделение》である(同上, c.94-5)。それらの機能は、「自己意識は欲求がするのとまったく同じように対象を生み出す」(同上, c.98)ことにある。省察もまた同様であろう。もちろん「対象を生み出す」といっても、外的対象を生み出すのではなく、意識の内部に対象を生み出す、ということである。

3

自己意識は自己についての知から始まるので、個別的であり、個性的である。つまり、自己意識は「個別的なもの」である(同上, c.101)。事物―意識という連関のなかにあった直接的な知が「いま」「ここに」いる「この人」(感覚的確信)から始まったのと同じように、意識―意識という連関、あるいは、自己意識から理性への発達においてもまた、個別性・個性・個人から始まっている。事物への直接的な知においては、結局、個別性と普遍性の関係は絶対的対立や空疎な普遍に終わったが、今回はやがて個別性と普遍性の空疎ではない内容豊かな関係(それには特殊性の概念が不可欠であるが)が待ち受けている。しかし、ここで今のところ重要であるのは、悟性は自己意識という個別的な意識をくぐらなければ理性に飛躍しないというヘーゲルの発達図式である。

4

自己意識の発達のメカニズムにとって重要になるのは、《自己意識の二重化

または分裂》である。ヘーゲルはそれを、どちらかと言えば私の内部のメカニズムと、外部との連関との、二つの方向において捉えている。

前者のメカニズムは次のような自己意識の規定に見られる。―「自己意識の概念は次のような三つのモメントにおいてこそ仕上げられる。すなわち、(a)純粋な区別されない自我は最初の直接的な対象である、(b)だが、この直接性そのものは絶対的な媒介性であり、この直接性は自立的な対象の止揚としてのみ有る。つまり、直接性は欲求である。欲求の充足は、なるほど、自己意識の自己自身への反照〔省察〕であり、あるいは、真理となった確信である。(c)だが、確信の真理は、逆に、二重化された反照〔省察〕、自己意識の二重化である」(同上, c.98)。このうち、メカニズム中のメカニズムは、(b)のモメントであろう。やや大まかに言えば、このモメントの内容は《事物―意識》の連関が《意識―意識》の連関に移行しつつあるものとして描かれている。前者における知の直接性は対象の自立性を前提としていたが、後者への移行にともなって、その自立性が止揚されると、直接性は媒介性となる。つまり、事物を意識する意識を意識するという点から、媒介性が生まれてくる。同時に、事物を意識する意識は事物の意識への反照〔事物を省察する意識〕を自己意識への反照〔意識を省察する自己意識〕を伴わせる。こうして、欲求が意識のなかに生み出した直接的な知は、自己意識を介して、たちどころに媒介的な知と化し、「普遍的な流動性」(同上, c.95)において知を省察することが可能となる。

後者の外部との連関とは、自己意識が個別的であるが故に生じる他者(他の自己意識)との関係のことである。その一つは、他者との相互承認である。ヘーゲルは述べている。―「それら〔自己意識〕の各々は、自己が行うことと同じことを他が行うことを見る。その各々自身が、他〔の自己意識〕から期待するものを行うのであり、それ故に、他〔の自己意識〕が同じことを行う限りで、同じく、他〔の自己意識〕が行うことを、行うのである。一方向的な行為は無益であるかのようだ。なぜなら、生じるべきものは二つ〔の自己意識〕によって実現されうるからである」(同上, c.100)。もちろん、二つ〔の自己意識〕による実現といっても、自己の自己意識のなかに浸透した他者に由来する「他のもの」を受け入れて実現するということであり、これはヴィゴツキーの規定する「対他」の段階に極めて近いと考えてよいであろう。いま一つは、二つの自

己意識(自己の自己意識における以前からの私に由来する部分と他者に由来する部分)の対立性であり、他の自己意識に由来するものを自己のなかで止揚することである。ヘーゲルが述べることの核心は次の点にある。—「自己意識は何よりもまず、自己からすべての他を排除したおかげで、自己自身に等しい、単純な対自的存在である。自己意識の本質と自己意識にとっての絶対的対象とは自我であり、この直接性あるいはその対自的存在としての存在において、自己意識は個別的なものである。自己意識にとって他であるものは、否定的性格を特徴とする非本質的な対象として有る。だが、他のものは同じくある自己意識である。個人が個人に反対して登場する」(同上, c.101)。ここに、形成されつつある自己意識に関与する実践の本質が現れている。働きかける人はまずは相手の自己意識のなかに「他のもの」として入り込むのだが、その結果、相手の自己意識によって止揚されねばならないのである。もはやそれは指導でも誘導でもない。相手に止揚されることを望むような助言(「否定的性格を特徴とする非本質的な対象」)である。そのことは主人と下僕、さらには絶対的主人についてヘーゲルが述べたくだりから、いっそう明らかになるが、これについては稿を改めて論じたい。

5

「自由な自己意識」において真の思惟が登場してくる。これはすでに理性の次元に入り込んでいるので、簡単に記しておこう。「無限性あるいは意識の純粋な運動において自己にとっての本質である意識は、思惟する意識あるいは自由な自己意識である意識である」と述べたうえで、ヘーゲルはそれを概念における思惟であると考えている。すなわち、—「思惟にとって、対象は表象あるいは形象のなかではなく概念のなかで運動する」(同上, c.107)。悟性の場合、ヘーゲルは対象は「表象」のなかで運動すると考えているが、それが行きつく先は内容的に空疎な普遍性であった。それに対照すれば、ここでの「概念」とそのなかでの対象の運動は内容豊かな普遍性であろう。しかし、ここで一点だけ強調するならば、人間はそのような普遍性にいきなり到達するのではなく、自己意識を介した概念、つまり、「私の概念」から始めねばならないことである。「私にとっての概念は直接的には私の概念である」。「概念における私の運

動は私自身のなかでの運動である」(同上)―ここに、自由な自己意識の核心がある。

6

ヘーゲルは自由な自己意識において概念にたどりついたが、ヴィゴツキーのユニークな点は、自己意識と概念との不可分の関係を「概念の崩壊」において明るみに出そうとしたことである。彼が依拠したのは、ヒステリー症、失語症、統合失調症に関する当時の精神病理学的研究である。彼は「発達は、病理学的諸過程、総合や高次の統一体の崩壊の諸過程を理解する鍵であり、病理学は、発達の歴史、高次の総合された諸機能の構成を理解する鍵である」(1931, c.400 / 1984 // 2004)と述べているが、ここで言われている「発達の歴史、高次の総合された諸機能の構成」の一つは、概念形成と自己意識の発達の不可分の関係である。ここでは、当時の統合失調症の研究から導き出したヴィゴツキーの結論だけを述べておこう。

> 統合失調症への私たちの考察を締めくくるにあたり、私たちの得た結論をシュトルフのことばによってまとめることができるであろう。「私たちが対象的意識の領域で示しえたように、統合失調症患者における対象的意識の異常性は、発達した人間の場合の世界の構図に分化・定式・一定の構造を付与する恒常的諸要素が喪失していることにもとづいているのだが、それと同じように、自我の意識においても恒常性の同様の喪失が平行的現象として明らかにされた。また、第一の場合に未分化で直観的な複合的諸性質が、定式化された諸事物や、従属的な心的体験の諸グループ、確固たる諸概念の世界に取って代わっているのと同じように、後者の場合には自我の完成した意識の位置を、部分的諸成分の複合的併存や、自我の境界の撤廃が占めるようになり、その故に、他の諸個人との拡散的融合や融即が可能となるのである」。
>
> だが、シュトルフのことばに、ひとつのモメントを、私たちの観点からすれば最も本質的なモメントを付け加えねばならない。そのモメントとは、現実の意識、世界の構図の心的体験、人格の自己意識の分裂の基礎にあるのは概念形成の機能の破壊である、という点にある(1931, c.430 / 1984, c.193-4 // 2004)。

7

以上は逆向きの発達からの規定であるが、ヴィゴツキーはそれを転倒させて、自己意識の発生過程を次のように述べている。

> 自己意識の過程がどのように発生するのかを追跡するなら、この過程は、高次形態の行動の発達の歴史のなかで、三つの基本的段階を通過していく、ということが見出される。始めのうち、あらゆる高次形態の行動はもっぱら外的側面から子どもによって習得される。主観的側面からすれば、この形態の行動は高次機能のすべての要素をすでに含んでいるものの、主観的には、つまり、まだこのことを意識していない子ども自身にとって、高次機能は純粋にナチュラルで自然的な行動様式である。他の人たちが自然的形態の行動を明らかに社会的な内容で充たすことによってのみ、それは、子ども自身にとってよりも前に、他者にとって高次機能の意義を獲得する。最後に、長きにわたる発達の過程で、子どもはこの機能の構成を意識しはじめ、自己の内的諸操作を制御し、それらを調整しはじめる(1931 / 1984, c.225-6 // 2004)。

この部分を注意深く読むと、自己意識の発生における三つの基本的段階は、即自—対他—対自の諸段階として描かれている。[9] 前述したように、これがヴィゴツキーとヘーゲルの接線である。ヴィゴツキーはこれを、自己意識にとどまらず、ことば以前の指示的身ぶり(指差し)のなかに原初的形態が見出されるあらゆる文化的発達過程の法則に高めたのだから、それは接線なのである。さらに、自己意識そのものの問題として捉えると、ヴィゴツキーの規定は、ヘーゲルが《即自的な自己意識から自由な自己意識へ、さらに理性へ》と描いた自己意識の発達図式とのパラレルな面を表している。あえて、両者の相違を指摘すれば、ヴィゴツキーが高次機能、概念的思考と呼んだものは、内容的には、ヘーゲルの場合の悟性と理性とにまたがっていることであろう。それ故に、ヘーゲルの図式では《自己意識から理性へ》という連関であるが(もちろん、その自己意識には媒介的な知、そのような事物に対する意識が含まれる)、ヴィゴツキーの場合には《概念的思考は自己意識の前提であるとともに結果でもある》という連関となる。もっとも、ヴィゴツキーが「真の概念」と呼ぶものは、ヘーゲ

ルにおける理性に属している。こうして、全体として見れば、両者の自己意識の発生と発達はパラレルな関係にあるのである。

V　ヘーゲル哲学の実践性

ヴィゴツキーを通して理解されるヘーゲルの自己意識論や悟性・理性との関連性は、きわめて原理的なものであると同時に、自己意識形成となんらかのかかわりのある実践に対しても甚だしく示唆的である。その点について、筆者による講義や卒業論文指導の経験のなかからエピソードを取り出し、より高次の概念的思考につながっていくと考えられる学生の自己意識の根について考察しておこう。

1

3回生前期に配当された言語に関する講義(2013年度)に対する受講生の授業コメントのなかには、次のものが含まれていた。

> この講義を聞いて、私は小さい頃に感じた違和感を思いだしました。それは、心の中でつぶやいた言葉は分かるのに、周りには聞こえてないし自分の耳でも聞こえないということです。いつから考え始めたのかは思い出せませんが、それは内言を意識し始めた時期と一致するのではないのかと思いました。そのときは不思議だなと思っていただけでしたが、講義を聞いてこれは重要な過程だったのだと感じました。

ここでまず注目しておきたいのは、この学生がかつて感じた「違和感」や「不思議」さである。正確な時期は不明だが「内言を意識し始めた時期」に感じたというのは間違いないであろうし、その違和感・不思議さは《事物の意識》から《意識の意識》への移行形態の一つであろう。この違和感・不思議さは、ヴィゴツキーの言う「心的体験 переживание」の個別事例である。まだ知的機能であるとか感情的機能であるとかと明確に区別できないが、そこから心理諸機能が発生してくる「一つ」の全体的な心理状態を心的体験と呼ぶとすれ

ば、まさしく、この違和感・不思議さはそれに該当する。しかも、重要なことは、それ自体が理性の次元にある《外言(他者への言語)から自己中心的言語(独り言など)を経て内言(自己への言語)へ》という諸概念の発生的な説明が、過去に体験した違和感・不思議さを思い出させ、自己意識の根を意識させたことである。いわば、概念の形成が自己意識の形成を促している個別事例なのだと考えることができる。[10] この学生が「重要な過程」と言っているのは、言語的には上記の発生的な連関のことであるが、それはさらに、言語の観点から教育学や心理学や社会学などの諸概念の網の目に成長していく可能性を秘めたものであろう。

2

筆者が担当したある学生の卒業論文の結論部分を考察してみよう。筆者は卒業論文のテーマについて、常々、テーマは自分が真に関心を持ちうるものにすること(そうであれば何でもよい)、ただし人間発達学部を卒業するときの論文であるからテーマを《人間の視点》から考察すること、という二つの点を学生に提起してきた。「真に関心を持ちうる」という点は、ヘーゲルが自己意識論に位置づけた「欲求」と響きあうからである。ある学生は写真部に所属するほど写真に魅せられており、カメラをテーマにしたい旨をゼミで発表した。最初の発表であるのでまだ海の物とも山の物とも判らないものであったが、研究室にあったベラ・バラージュの『映画の理論』を渡して、サイレント映画を分析した部分が含まれているので、写真に通じるものがあるかも知れない、参考になるかどうかわからないが一読してごらん、とことばを添えた。その後のゼミ発表と個別指導については省略するが、この学生の卒業論文は次のような結論に至った。

> 私は、写真・映像についていろいろなことを知ることができてよかった。現代を生きる我々は、昔の写真・映像が一体どのようなものであったかを知らなかったからである。写真は、どんなによい写真でも時間が経てば記録となってしまうのは少し悲しかった。映像は写真から始まり、写真や映像を見るのは我々の目である。その目が見る範囲は視野である。私は、カメラが好きで、映像に興味があったのでこ

のような論文にしたが、論文を書いていく内に視野について興味を抱いたのである。その視野は我々個人によって異なっており、そこに映る世界は人によって異なっている。物事を客観的に捉えることが大事とよく言われるが、我々の視野は個人によって異なるので、どうしても主観的になってしまうという矛盾が生じて面白い。そこから私は、地図上の世界は１つしかないが、我々が見る世界は地球上にいる者の数だけ世界は存在していると考えている。したがって、世界は自分を中心に回っているといっても過言ではないだろう。このような考えに至ることができた。

最後の個別指導のときに、この部分を読んで、筆者はこの学生の思考の発達のなかに飛躍が生じている（悟性から理性への飛躍）と感じて、「物事を客観的に捉えることが大事とよく言われるが、我々の視野は個人によって異なっており、そこに映る世界は人によって異なっている」と、どうしてこのように考えるようになったのか、と質問した。学生の解答は「小学生のとき校庭はすごく広いと思っていたが、いま同じ校庭を見ると、こんなにも小さかったのか、と感じた」というものだった。筆者はさらに、なぜそのように言えると思ったのか、と第二の質問をした。その解答は「小学生の視点は低い位置にあるからだと思う」というものであった。カメラを扱う人らしいことばである。筆者はこの二つの解答を聞いて、この学生の結論は借り物ではなく、自己意識に根ざしたこの人自身のもの、つまりヘーゲルの言う「私の概念」である、と判断できたのである。ここで、さらに重要なことは、「物事を客観的に捉えること」と「我々の視野は個人によって異なる」「主観的なもの」という「矛盾が生じて面白い」という《矛盾の感覚》であろう。これは、前者の学生の「違和感」「不思議」に相通じるものであり、このような違和感、不思議、矛盾感覚をもって世界を眺めることができるとき、人は研究というものの扉の前に立ち、その扉を開けたことになるであろう。ヘーゲルが言うように、「自己意識とともに……〔理性の〕真理の王国に足を踏み入れている」（1807 // 2002, c.93 // 1997）からである。そして、発達的には中学生が到達しうる思考形式（常識としての悟性）を乗り越えていく大学教育の真の要諦も、ここにあろう。

Ⅵ　おわりに

小論は、ヘーゲルの『精神現象学』によりながら、ヴィゴツキー理論における自己意識と概念的思考について深めいくことを目的としたが、読み返してみると、ヘーゲルの理解もヴィゴツキーの理解もまだ探究の途上にとどまり、中途半端さを免れていない。ヘーゲルによってヴィゴツキー理論を豊かにし、また、ヘーゲルをヴィゴツキーによって現代的に甦らせる、という、いまはまだおぼろげな隠された意図からすると、小論はまだその扉の前に立ち止まっている。ヘーゲルにおける発達図式を捉える枠組をより大きく、かつ、精密にすることが、いまは不可欠である。

それと同時に、ヴィゴツキーの観点からすると、ヘーゲルをより精密に理解したとしても、それはヴィゴツキー理論における自己意識と概念的思考の一側面に光を照らすものであることを自覚しておかねばなるまい。もう一つの側面に光を放っているのはスピノザ(1632-77)である。ヴィゴツキーは次のようなメモを残している。

> スピノザの路線にもとづいた、概念に関する私たちの研究。
> クリューゲル、ケーラー――知覚における感情
> 感情の概念は、能動的状態であり、自由である：
> 自由：概念における感情。
> 自閉的思考。
> 統合失調症　感情の崩壊
> 人格発達の壮大な構図：自由への道。マルクス主義心理学のなかにスピノザ主義を蘇生させること(2006, c.295)。

このメモが含意するものは、概念あるいは概念的思考と情動との関係が今後の概念に関する心理学的研究に必須であること、であろう。ここで詳述する紙幅はないが、筆者はヴィゴツキーを導き手としてスピノザの情動発達論のなかから五つのフェイズを取り出したことがあった。すなわち、(1)「身体の変化と

しての情動」、身体＝情動、(2)「身体の変化の観念としての情動」、思考の主人としての情動、(3)「身体の変化の観念の観念」、自己の情動の認識、(4)情動の主人としての思考、(5)「第三種類の認識が最大の満足をもたらす」、思考＝情動、より正確には、「神または自然＝自由なる必然性」の認識がもたらす情動(2010, 第 IV 章参照)。

第三のフェイズはいわば情動面での自己意識と捉えられるものであり、これを軸にして、主として《身体―情動》の連関が主として《思惟―情動》の連関へと大きく飛躍を遂げるという発達図式を描くことができる(もっとも、情動の最初の二つのフェイズは知の場合のように低次機能が高次機能の下層に閉じ込められることはないが)。こうして、ヘーゲルによる発達図式とスピノザによる発達図式は自己意識において真に交差することが判る。

したがって、ヴィゴツキー理論における自己意識と概念的思考の問題の十全な理解には、ヘーゲルの『精神現象学』とともにスピノザの『エチカ』を踏まえることが必須の事柄であろう。その鍵はここでも自己意識論にある。

参考文献

Гегель, Г. В. Ф（1807 // 2002 // 1997), Феноменология духа // То же, пер. Г. Шпета, Спб., Наука // 精神現象学、樫山欽四郎訳、平凡社

神谷栄司（2010)、未完のヴィゴツキー理論―甦る心理学のスピノザ、三学出版

Lewin, Benjamin et al（2007 // 2008), Cells // ルーイン細胞生物学、永田和宏他訳、東京化学同人

Выгодская, Г. Л., Лифанова, Т. М.（1996), Лев Семенович Выготский. Жизнь. Деятельность. Штрихи к портрету., М., Смысл〔ヴィゴツカヤ、リファノヴァ、レフ・セミョーノヴィッチ・ヴィゴツキー：人生、活動、ポートレートの輪郭〕

Выготский, Л. С.（1924 / 1982 // 1987), Методика рефлексологического и психологического исследования / Выготский Л. С., Собрание сочинений, т. 1, М., Педагогика // 心理学の危機、柴田義松・藤本卓・森岡修一訳、明治図書〔ヴィゴツキー、反射学的方法と心理学研究の方法〕

Выготский, Л. С.（1927 / 1982 // 1987), Исторический смысл психологического кризиса / Выготский Л. С., Собрание сочинений, т. 1, М., Педагогика // 心理学の危機、柴田義松・藤本卓・森岡修一訳、明治図書〔ヴィゴツキー、心理学の危機の歴史的意味〕

Выготский, Л. С.（1929 / 2003 // 2012), Конкретная психология человека / Выготский, Л. С.,Психология развития человека, М., Смысл-Эксмо // ヴィゴツキー、「人格発達」の理論、土井捷三・神谷栄司監訳、三学出版〔ヴィゴツキー、人間の具体心理学〕

Выготский, Л. С.（1931 / 1983 // 2005), История развития высших психических функций, / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 3, М., Педагогика // 文化的―歴史的精神発達の理論、柴田義松監訳、学文社、2005年〔ヴィゴツキー、高次心理機能の発達史〕

Выготский, Л. С.（1931 / 1984 // 2004), Педология подростка. Глава IX-XVI, Государственноеучебно-педагогическое издательство, М.-Л./ Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 4, М., Педагогика // 思春期の心理学、柴田義松・森岡修一・中村和夫訳、新読書社〔ヴィゴツキー、少年の児童学、９～16章〕

Выготский, Л. С.（1934 / 1982 // 2001), Мыщление и речь / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 2, М., Педагогика // 思考と言語、柴田義松訳、新読書社〔ヴィゴツキー、思考と言語〕

Выготский, Л. С.（2001 // 2012), Лекции по педологии, Ижевск, Издательский дом Удмуртский университет //「人格発達」の理論、土井捷三・神谷栄司監訳、三学出版〔ヴィゴツキー、児童学に関する講義〕

Выготский, Л. С.（2006), Два фрагмента из записных книжек Л. С. Выготского, Вестник РГГУ номер 1〔ヴィゴツキー、エリ・エス・ヴィゴツキーのメモ帳からの二つの断片〕

Завершнева, Е. Ю.（2006), К вопросу о периодизации научной биографии Л. С. Выготского, в журн.: Вестник, номер 1, РГГУ〔ザヴェルシネヴァ、エリ・エス・ヴィゴツキーの学術著作史の時期区分の問題によせて〕

注

1）ヘーゲルの場合は、形象―表象―概念である。あるいは、感覚的確信と知覚―悟性―理性である。

2）ヴィゴツカヤらは、ヴィゴツキーが学生時代に妹とともに「数年間、グスタフ・グスターノヴィッチ・シュペットのセミナーに、系統的、積極的に参加した」と記しつつも、そのセミナーの内容までは書いていない(1996, c.39)。また、ザヴェルシネヴァは、このセミナーを通して、ヴィゴツキーはポテブニャ、フンボルトに注目した旨を記しているものの、この時期におけるヴィゴツキーの見解の「生成史」について、歴史家の研究が待たれる、と述べている(2006, c.292)。

3）ヘーゲルとヴィゴツキーの諸概念を関連づけることが小論の目的の一つであるので、『精神現象学』はシュペットによるロシア語訳から引用する。

4）ヘーゲルは次のように書いている。――「普遍性は概して知覚の原理である。……〔知覚の次元においては〕自我は普遍的な自我であり、対象も普遍的な対象である」（1807 // 2002, c.60 // 1997）。

5）《紙》という語は「いま」「ここに」ある紙の個別性を表しえないが、そうした個別性をことばによって表現するものが記述である。それは語に対する小説に似ている。もっとも、その知がもはや感覚的確信の次元にはないことは明らかであるが。

6）止揚については特に注釈をする必要はないと思われるが、ヘーゲルはこの概念について次のように述べている。―「止揚は、私たちが否定的なもののなかに見出したその真に二重の意義を表している：その意義は否定の過程であると同時に保存である」（1807 // 2002, c.61 // 1997）。

7）ヘーゲルは「いま」を事例にあげて感覚的確信に固有な運動を描いている。―この点について「私たちは運動とその次のような進行のみを見出す。すなわち、⑴私が『いま』を指すと、その『いま』は真なるものとして確立される。だが、私が『いま』を過ぎ去ったもの、つまり、止揚されたものとして指すと、私は第一の真理を止揚することになる。そして、⑵私は『いま』を過ぎ去ったもの、止揚されたものという第二の真理を確立することになる。⑶だが存在したものは〔いまは〕ない。私は『いま』があったこと、あるいは、止揚されたこと、つまり第二の真理を止揚し、この真理に『いま』の否定の否定をこうむらせる。こうして、第一の主張―『いま』はある―に戻るのである」（1807 // 2002, c.56 // 1997）。このように、感覚的確信に固有な弁証法では、本来的な意味での「発展」が奪われている。つまり、この弁証法は立体的な螺旋ではなく平面上の円環を描いている。

8）このことは、ヴィゴツキーが研究方法として《現象の単位》を発見し設定することが重要なのであって、現象の要素への分解は意味をなさない、と述べた、《要素への分解》に似ている（1934 / 1982 // 2001, 第 1 章参照）。

9）ヴィゴツキーは、自己意識の発達が始まると考えられる13歳の危機について、よりミクロな分析を試み、そこにノーマルな「分裂機能」を心理的新形成物として取り出している（2001 // 2012）。

10）自己意識が理性の次元における真の思惟の契機になるという観点からすれば、現在の中等教育は上記のような種類の違和感・不思議さを多方面において育てていくことにあまりにも無頓着であり、また、大学教育もそのことの価値にあまりにも無自覚である。ここに現代の教育が「考える力」を改めて主張しつつもその実現に本格的に着手できない不幸がある。